

オーストラリアの保育・幼児教育の現状

— 日本の文化的言語的に多様な子どもへの支援にむけて —

平 野 知 見¹⁾・亀 岡 正 睦¹⁾

1. 問題の所在と目的

近年の国境を越えた人的移動の活性化は、一国内における多民族・多文化状況の生成を促し、これは世界的な現象となっている。日本においては、1989年に「出入国管理及び難民認定法（入管法）」が改正、1990年に施行された。これにより、日系3世まで就労資格が認められるようになったため、ニューカマーと呼ばれる南米、とりわけブラジル人出身の外国人登録者数が増加したのである。2000年1月に国連経済社会局は、日本は年間60万人移民（労働者とその家族を含む）の受け入れが必要であると発表した。日本社会は、グローバル化の進展に伴い多民族化し、1999年度2月末の外国人登録者数が、1,556,133人で総人口の1.23%を占めるに至ったのである。これは20年間で約2倍増加したことになるという。そして現在、日本における2018年末の在留外国人数は、273万1093人で、前年末に比べ16万9245人（6.6%）増加となり過去最高を示している。また在留カード及び特別永住者証明書上に表記された国籍・地域数は195（無国籍を除く）であり、上位10カ国・地域のうち、増加が顕著な国籍・地域としては、ベトナムが33万835人（26.1%増）、ネパールが8万8951人（11.1%増）、インドネシアが5

万6346人（12.7%増）となっている。

次に、ニューカマーの数が多い県として上位にあげられる滋賀県においてはどのような背景があるのか概観する。2015年度から2019年度までの多文化共生推進の方向性を定める「滋賀県多文化共生推進プラン（改定版）」が策定された。その中で入管法以降の県の背景が説明されているが、滋賀県の外国人登録者数は、1990年末では10,170人であったが、2008年末には32,292人で滋賀県においてはピークとなったという。これらの外国人住民の多くは派遣や請負の雇用形態で、製造業などで就業し、地域経済を支え、地域社会にも貢献してきた経緯がある。しかしながら2008年秋以降の世界的な経済危機により製造業の現場で就労していた多くの外国人住民が職を失い、日本語能力の不十分なことなどから再就職が難しく、生活困難な状況におかれる人や帰国する人が増加し2013年末、24,712人で減少する傾向を示した。このような状況の背景では、日本人住民と同様に、外国人住民に対し基礎的行政サービスを提供する基盤となる制度の必要性が高まり、また国際結婚による複数国籍世帯の増加により、2012年7月より、外国人住民も住民基本台帳制度の適用対象となっていた。2015年時点において、滋賀県商工観光労働部観光交流局は、アジア地域か

¹⁾教育福祉心理学科

らの技能実習生や、留学生、さらに国際結婚による外国人配偶者などについて増加するという予想をし、就労・生活する言語的・文化的に多様な外国人住民の滞在が以前にまして長期化、定住化が進むと考えられていると指摘していた。一方で上記のような状況から、家族とともに滞在するという一方で、労働者自身を取り巻く就労問題だけでなく、その子どもの生活に関しても多様な問題が浮き彫りになってきている。特に小学校以上の子どもの不就学や不登校の問題が、外国人が多く集住する地域で表面化している（佐久間、2011；殿村、2008）との危惧もある。また就学前の子どもたちの人数についても増加の一途を辿っている。

2019 年を迎え、4 月 1 日に外国人労働者の受け入れを拡大する改正出入国管理法が施行されたばかりである。人材不足が深刻な 14 業種で就労を認める新たな在留資格「特定技能」を導入し、5 年間で最大約 34 万 5 千人の受け入れ

ることを見込んでいる。また運用の主体となる出入国在留管理庁も同日に発足している。つまり在留管理と外国人の雇用や生活支援の両面を担うというのだ（日本経済新聞、2019）。

今回の改正出入国管理法の施行により、保護者が働いている時間帯に就学前の子どもを受け入れている保育所・園において、今後も文化的・言語的に多様な子どもたちが入所するということは予測される。保育現場において、多様な背景の子どもたちを受け入れた経験のない保育者たちにとっては、その子どもや保護者に対し、どう対応すればよいのか、また就学に向けての支援をどのように進めていけばよいのかなど、困惑の声が増えるのではないかと懸念されるが、変わらないのは、その対応方法自体が自治体任せであるという点である。

上記の問題意識を出発点とし、本論は、文化的・言語的に多様な子どもたちの保育・教育的支援について、国をあげて取り組む多民族国家

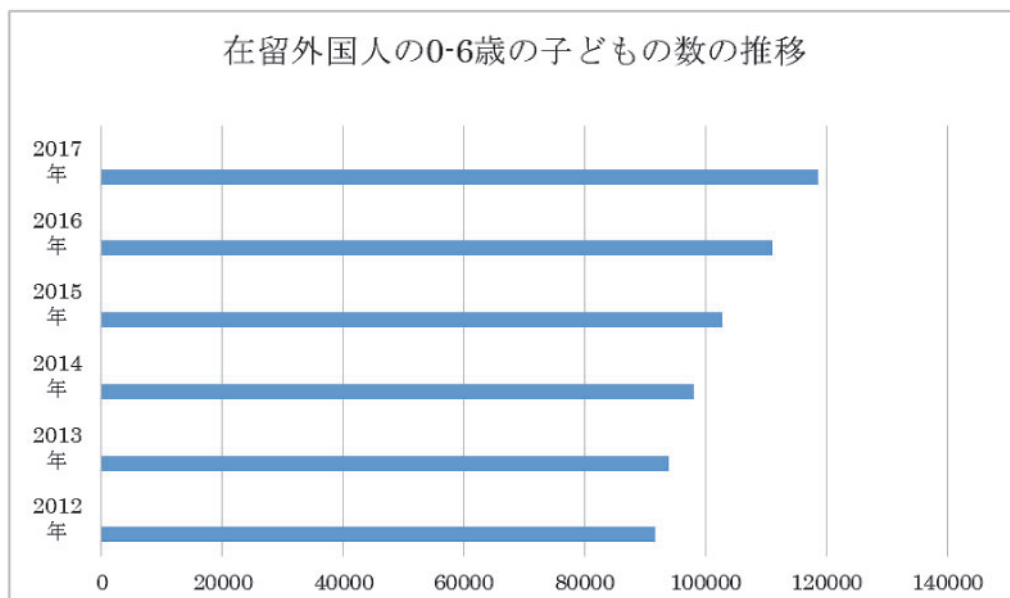


図 1. 在留外国人の 0-6 歳の子どもの数の推移

※朝日新聞（2019 年 1 月 5 日「増える外国人の子、保育現場困惑も」より作成

2012 年：9 万 1595 人、2013 年：9 万 3926 人、2014 年：9 万 8133 人、2015 年：10 万 2805 人、2016 年：11 万 1189 人、2017 年：11 万 8690 人

であるオーストラリアに注目し、近年の保育・教育施策を中心とした動向を2019年1月16日、本学に海外からの講師として招聘した Adrienne Beattie-Jeive の講演資料（事前打ち合わせでの情報含）を基盤とし検討する。またそのオーストラリアの動向から、The NQF（国の質の枠組み）の中核となる NQS（国の質基準）について探求し、オーストラリアの保育の評価と課題について考察する。加えて日本における文化的言語的に多様な子どもへの支援について就学前保育・教育から小学校接続に関して示唆されることは何かを探る。

2. オーストラリアの教育政策の潮流と制度

今世紀は、多様な民族・文化の共存または共生は必須の事であるが、オーストラリアの多文化教育の実態はいかなるものであったのか、簡単に歴史的背景を概観し、現在の制度を整理する。

オーストラリアは、連邦政府が1970年代に多文化主義政策を採用して以来、公正を重視する政策を実施してきた。多文化主義は社会における公正の実現を目指し、その公正を実現するためには、移民などがもたらす文化的・言語

表 1. オーストラリアの保育・教育制度

名称	年齢	備考
Long Day Care Centre ：保育園	生後6週間後より入園可能。	* 保育料は2018年時点、1日、0-2歳で\$95-160。3-4歳で\$90-140。 * 補助金は年収\$35万以上の家庭にはない。それ以下の家庭には収入に応じてある。 * 例えば年収\$10万の家庭の場合、約60%の補助金。 * お迎えが遅い場合は時間に応じた罰金が科せられる。 Binalong Cottage Kindergarten では1分で\$1。
Year K (kindergarten: 小学校プレ1年)	5-6歳児を対象（5歳児は義務教育ではないが、ほとんどの子どもが入園する。また6歳から義務教育となる）	* 以上の Year K から Year10 までが義務教育。授業料は無料。外国人は公立校で年間\$6000 - 12000ドル。私学なら年間\$6000-30000が必要。 * NSW州の例だがYear 1は7月31日時点で満6歳になる者は同年の1学期開始日に入学する。
Year1-6 (Primary School: 小学校)	6歳から 11/12歳	
Year7-10 (Junior Secondary School)	12/13歳から15歳	
Year11-12 (Senior High School)	16歳から17歳	
TAFE (Technical and Further Education)	16歳から入学可能	
University	18歳から入学可能	・ 授業料は平均\$20000-30000。市民権者は\$5000-6000。 ・ アジアからの留学生が多く在籍。 ・ 奨学金制度 HECS (Higher Education Contribution Scheme) - HELP (Higher Education Loan Program) が手厚い。 就職後に返済義務はあるが給与が少なければ免除。

※オーストラリアのNSW州にある Binalong Cottage Kindergarten の園長講演資料（2018）を基に筆者作成

的多様性への対応が不可欠であると認識し、学校教育では、すべての生徒に対して多文化の価値を醸成する多文化教育 (multicultural education) が積極的に実施されてきた (中島、1998)。また、エイドリアン (2019) によると、近年において社会的公正をさらに推進するために、文化や言語以外の要素も多様性の重要な側面として包摂し、個々の教育的ニーズに対応するインクルーシブ教育 (inclusive education) が保育現場においても推進されているという。以下 (表 1) には、オーストラリアの保育・教育制度 (NSW 州) について簡単に示している。

オーストラリアは、学校教育の流れが多文化教育からインクルーシブ教育へと変わり、文化や言語を含めた様々な要素を包摂して多様性に対応しようとしている。この点に着目し、次に保育・幼児教育者の資質・能力の形成をねらいとした改革について検討する。

3. オーストラリアの保育・教育の現状

(1) 保育施設と資格

オーストラリアは国をあげての幼児教育・保育の質向上を目標とした改革が動き出し、幼児教育・保育の質の改善が盛り込まれ改革がスタートした。オーストラリアの保育施設には、多様な種類があり各州によって名称が異なっているが、NSW 州の保育施設にエイドリアン氏の講演資料 PPT を一部抜粋し、The National Quality Framework (NQF: 国の質の枠組み) の中核となる The National Quality Standard (NQS: 国の質基準) について探求する。

まずオーストラリアの保育施設はフォーマルケアとインフォーマルケアに分類される。その中でもフォーマルケアと位置づけられるものには、Long day care (LDC: 保育園)、Family day care (FDC: 家庭的保育)、Occasional child care

(OCC: 一時保育)、Outside school hours care (OSHC)、Preschool (幼稚園)、In-home care (訪問型保育: 子どもや親に障害、遠隔地、保育サービスを利用できない保護者の労働時間帯、未就学児が 3 人以上いる場合) がある。

保育園 (LDC) は、施設型保育であり、0 歳から 5 歳を対象としている。1 週間に 1 日から 5 日通園するなど個別で異なっている。開園時間は朝 7 時から 18 時までであり、年間通して 48 週間保育をしている。費用は 1 日オーストラリアドルで 70 ドル～185 ドルであり、家庭の年収や勤労形態によって保育費用が削減される (PPT1. 参照)。また幼稚園 (Preschool) 3 歳から 5 歳までを対象とし、1 週間に 2・3 日通園する子どもが多い。開園時間は朝の 9 時から 15 時までで、1 年間で 4 学期制とし、1 学期が 10 週間とされている (PPT2. 参照)。

施設型保育の保育者と子どもの人数比率 (NSW 州) は、保育者 1 人に対し子ども 4 人 (0 歳から 2 歳未満)、保育者 1 人に対し子ども 5 人 (2 歳から 3 歳児)、保育者 1 人に対し子ども 11 人 (3 歳から 5 歳児) である (PPT3. 参照)。日本の場合、国が定めた保育士と子どもの人数比率 (配置基準) は保育士 1 人に対し 0 歳児は概ね 3 人、保育士 1 人に対し 1、2 歳児は概ね 6 人、保育士 1 人に対し、3 歳児は概ね 20 人、保育士 1 人に対し、4、5 歳児は概ね 30 人と年齢が上がるにつれ、オーストラリアと日本との保育者が関わる子どもの数の比率差が大きくなっていく。

家庭型施設である、家庭的保育 (FDC) は、0 歳から 5 歳を対象としており朝 7 時から 18 時までであるが、夜の保育も親の事情により可能となっている。年に 48 週保育が実施されており、保育者一人に対し、7 名まで預かることができるが、条件として、5 歳以下が 4 名、学童の就学児が 3 名までとしている (PPT4. 参照)。

またオーストラリアでは遠隔地に居住しているため、通常の保育サービスを受けられない子どものために、移動型保育サービスがある。保育者がおもちゃや遊具を積んだトランクを運転し遠隔地をまわり、到着したら全ての遊具等を設置し、その日の終わりには、全てをトラックに乘せ、運転し戻ることを繰り返す。これは保育者にとっては、運転から保育設置、保育全てを担うということで、かなりの重労働である（PPT5. 参照）。

LDC、FDC、OSHC については、認可保育であり、質基準と運営に関する条件を満たさなければならない。その基準となるのがNQF（国の質の枠組み）であり、国の法律と規則、国の質基準、国の質評価とアセスメント・プロセス、合理的な法規制上の措置、オーストラリア保育室評価機関を通して、保育及び学童保育の質の向上及び、継続的な改善と保育サービスの一貫性をもたせることを目的に2012年1月施行された（PPT6. 参照）。またNQFのWEB上では、質に影響をもたらすものとして、保育者の資格要件と保育者と子どもの人数の比率が低いという2要素が、特に幼い子どもと不利な背景をもつ子どもにとって有益であると示されている（泉、2017）。

ECEC services

Centre-based

▪Long day care

- 0 – 5 year olds, 1 – 5 days/week
- 0700 – 1800
- 48 weeks



AU\$70 – AU\$185/day less fee help
85%, 50%, 20%, 0% – depends on family income & 'activity'

PPT1. 施設型保育園（LDC）

▪Preschool

- 3 – 5 year olds, 2 or 3 days/week
- 0900 – 1500
- 4 terms x 10 weeks



AU\$45 – AU\$80/day less fee help

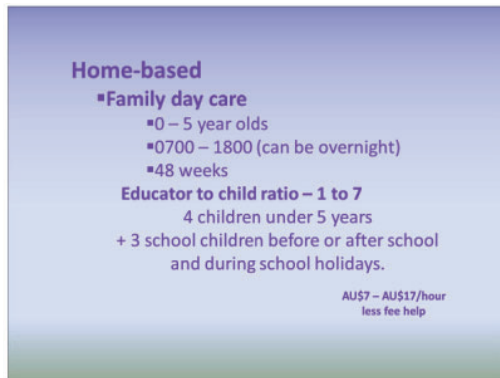
PPT2. 幼稚園

Educator to child ratios for centre-based services



Birth – 2 years 2 – 3 years 3 – 5 years

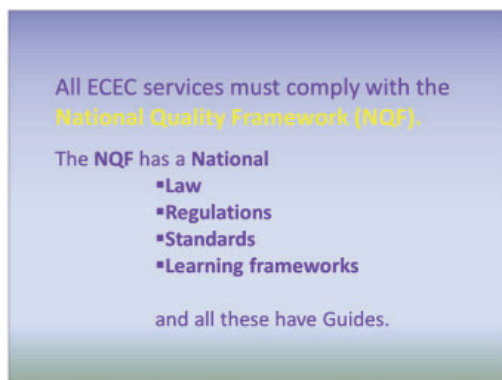
PPT3. 施設型保育の保育者と子どもの人数比率



PPT4. 家庭的保育



PPT5. 移動保育サービス



PPT6.NQF (国の質の枠組み)

乳幼児期の教育・発達が最善の状況で子どもたちが楽しむことができるよう NQS は質の継続的改善を図る (PPT7. 参照)。対象となるのは、LDC, FDC, 学童保育、幼稚園であり、NQS に基づき保育の評価を実施する。NQS は、7つの質

領域、15の質基準、40の要素、5段階で評価する。このNQSに関して、保護者・子どもにとっての主要な利益は5点あり、それらは、保育者と子どもの比率の改善、一人ひとりの子どもへの関わり、保育者の技術と資格向上、子どもの学びと発達のよりよいサポート、保護者が居住地の保育の質を評価できるための国家登録制度である (泉、2017) という。



PPT7. 国の質基準

では、具体的に7つの質領域とはどのようなものか、その領域の具体例とともに以下に示す (PPT8. 参照)。

- ① 教育計画と実践：一人ひとりの子どものプログラムと発達についてのドキュメンテーションを家族も利用できる
- ② 子どもの健康と安全：保育者、コーディネーター、職員は全ての子どもの虐待やネグレクトの危機に対応するための役割と責任を認識
- ② 物的環境：建物のデザインや、立地は保育の実施において適切である
- ③ 職員の配置：すべての職員が協働的であり、技術の発展や実践・関係性改善のためお互いを肯定し努力しサポートし学び合っている
- ④ 子どもとの関係性：一人ひとりの子どもと

の相互作用は温かく、応答的で信頼関係が築かれている

- ⑥ 家族と地域との連携協力：家族は、子育ての役割や子育てについての価値や信条を尊重されるよう援助されている
- ⑦ 管理とリーダーシップ：効果的な自己評価と質改善プロセスを実施



PPT 8. 7つの質領域

4. 今後の課題と小学校への接続にむけて

これまで、オーストラリアの保育及び質向上のための評価システムを概観してきたが、課題も残されている。まずは、オーストラリアは多民族国家である故に、英語を母語としない保育者が多く勤務している。よって、評価に伴う事前の準備や日々の記録等の多さには英語をネイティブとする保育者にとっても大変な作業である。よって、評価基準項目の削減が今後必要となってくるだろう。加えて、保育施設側による評価可能となると、保育の運営がよりスムーズとなる。一方で、査察者にとっては評価にかかる時間短縮も考えられる。

オーストラリアの各州において、保育者の配置基準にばらつきがあるため、今後国基準で統一する必要も出てくる。これは、国全体がある同一の条件で質の向上を目指すためには必須のことであろう。そして多様な文化を尊重すると

いう歴史的背景がある中、乳幼児期から先住民のインクルージョンを視野にいたれた保育の実践がより必要となってくるだろう。

最後に、日本とオーストラリアの小学校への接続に関して述べる。日本においては就学前保育・教育と小学校教育との連携が重要視され、各市町村においても子ども間、教員間における交流活動が様々な形態で実施されている。これは平成20年1月の「中央教育審議会答申」において幼稚園教育の充実を図る方向性の一つとして「発達や学びの連続性を踏まえた幼稚園教育の充実」が示され、子どもの発達は幼児期とそれ以降で連続しており幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図り、幼稚園教育の成果を小学校につないでいくことが重要であるとされたことも、現場教員の意識が高まる要因の一つとなったと考えられる。また幼児教育と小学校への円滑な接続の図るため「スタートカリキュラム」の作成にむけて実践事例を集めカリキュラムとして構築していく学校園が多い中、保育園所に多く在籍している文化的言語的に多様な子どもを対象とした小学校への円滑な接続を鑑みたカリキュラム作成に関する研究は未だ皆無である。

オーストラリアの場合、「transition to school」（小学校への接続）という視点でフォーマルなカリキュラムは作成されていないが、多様な背景（先住民や移民など）をもった子どもたちやその家族への支援が提起され、言語や科学的リテラシーに着目、つまり幼児の探究心を育むことで科学的思考力を育成しようという取り組みがナショナルカリキュラムを通して進められてきた。また小学校への接続に関するWEB上の情報として動画を多く発信し、接続期には子どもたちにとってどのような環境の変化があるのか、学校では何をするのか、実際子どもと関わっ

た保護者の声や研究者による理論的説明など、視覚的にも理解できるよう内容を作成している(資料1参照)。これらの動画発信やWEB情報は、文化的言語的に多様な子どもや保護者にとっても有益な情報になると言える。日本では保護者向け、子ども向けに発信されることのない小学校への接続にむけての考え方や動画がオーストラリアでは身近に情報収集することが可能で、かつ、わかりやすくとりあげられている。日本や諸外国においても文化的言語的に多様な子どもたちを対象とした接続期カリキュラムの作成は、今までの就学前保育・教育と小学校接続について、より深く取り組む際の実践的・有効的な示唆を与えることができると考えられるため、この動画や情報が今後の小学校への接続に関する考え方、発信方法の一助となるだろう。

資料 1. THINKING ABOUT TRANSITION TO SCHOOL

Video Host

Starting school is a big step for you and your child. Children who make a positive start to school are more likely to feel comfortable and develop a sense of belonging to the school community. They're also more likely to feel excited and motivated to learn.

Together, children and their families, early childhood education and care services and schools, help children along their journey. Starting and settling into school is not just about the first day; it begins when children and families start to prepare in the year before, and continues as children experience their first days, weeks and months of school.

WHAT DO YOU THINK WILL HAPPEN AT SCHOOL?

Children

- When the bell rings you go ... come inside or line up at the door to go outside.
- We'll get to go to the library and we'll actually get

to choose a book.

- Write my name. Do homework.
- Ummm ... Play.
- Um, going on excursion.
- There's only one teacher and they don't want to get a headache.

Associate Professor –University of Melbourne

Starting school involves a number of changes for children and their families, and everyone reacts differently to these.

As a starting point it can be helpful to think about how your child copes with change and how you have supported them through change before.

The changes that children experience when they begin school relate to:

- The new physical environment which is often bigger and busier,
- New rules and procedures for the day,
- The relationships they will need to develop with teachers, staff and other children, and of course
- The new learning experiences that school offers.

As a starting point it can be helpful to think about how your child copes with change and how you have supported them through change before.

HOW WILL YOU GET READY FOR SCHOOL?

Children

- We have to wear a special school uniform.
- You have to wear a school dress if you're a girl.
- And we need to take a backpack, our school bag.
- Pack my lunchbox with lasagne.

Associate Professor

There is a range of skills that your child has been developing that will help them as they settle into school. Some of these areas of development include their social and emotional skills, their independence and their learning skills.

Social skills include being able to share and to take turns, spending time talking and playing with other children, and understanding how to be a good friend. Being able to **manage emotions** are

important skills for coping with challenges and for getting along with others.

A child's **independence** develops as they are encouraged to do more things for themselves, like getting dressed, packing their bags and making their own decisions.

And then there are the **learning skills**, like being able to listen to a story, stay focused on a task, share ideas with other people and make choices between activities. These provide the basis from which children learn the more academic skills of reading and writing.

Children have different rates of development and they won't all have these skills when they start school; but they will learn and develop them over time.

Educator

Sometime parents worry that their children should be able to write their name or know the alphabet before they start school. These skills are important but not all children are ready to do this before they start. Building on a child's skills and strengths helps ensure they're prepared for the changes that school brings. I guess what I tell parents is that school will continue to build these skills. That means **emotional skills, social skills, academic and creative skills**.

THE FIRST DAY

- When it was my first day and my dad left I was a bit sad. And my mum and dad came to school and they dropped me off – I was a bit sad.
- Sometimes when you start you might feel a bit scared and I felt like, yeah. But, I was happy as well to start.

Parent 1

You know, like any parent on the first day, it's quite upsetting seeing your little child and seeing them in their school uniform for the first time and in front of the other kids too – they actually look so tiny.

School Teacher

I did notice some kids looking a little worried but I think that's because most of them have done that

TTS program and the parents had been given literature about how to prepare their kids. I think most kids weren't nervous.

Parent 2

What actually happened was that, you know, we took her down there, gave her a quick cuddle, said good bye and that's it, she was so excited she just walked off and, you know, we're left standing there going, Ummm, you know, "Where do we go now?"

Video Host

Making a positive start to school helps your child to continue to develop their social, emotional, independence and learning skills which all contribute to your child's mental health and wellbeing.

Children who are mentally healthy are better able to meet life's challenges. They're also better learners and have stronger relationships.

<https://www.youtube.com/watch?v=UcINGuysBE> から抜粋

謝辞

本研究ノートは「ともいき研究推進センター学長指定研究A」の研究成果の一部であり、とりわけ The National Quality Framework の中核となる The National Quality Standard (NQS) の資料については「学長指定研究A」の研究費によって招聘したエイドリアン氏講演資料によるところが大きい。本研究に支援いただいた関係諸氏にあらためて感謝の意を表したいと思います。

引用・参考文献

- Adrienne Beattie-Jeive 2019年1月19日講演時のPPT
「ECEC in Australia」
Harden-Thew, Kathryn, Story, restorying, negotiation: Emergent bilingual children making the transition to school, Doctor of Philosophy thesis, School of

- Education, University of Wollongong, 2014. <http://ro.uow.edu.au/theses/4192>
- 平野知見 (2008) 『オーストラリアの多文化保育に関する意識と実態：チーム援助の視点から』 オーストラリア研究紀要 34 号、追手門学院大学オーストラリア研究所、pp. 161 – 180.
- 平野知見 (2010) 『生活科における幼小連携と教師の協働』 京都造形芸術大学紀要「GENESIS」15 号 155-162.
- 平野知見、鈴木祥子、竹下秀子 (2011) 『「多文化な子ども」の就学前保育に関する調査研究報告書』 2010 年度滋賀県緊急雇用創出事業臨時特例基金委託事業、滋賀県立大学大学院.
- 井上美智子 (2011) 『環境教育の観点からみたオーストラリアクイーンズランド州の幼児教育施策』 教育福祉学研究 大阪大谷大学 37. 1-12
- 泉千勢 (2017) 『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのか：子どもの豊かな育ちを保障するために』 ミネルヴァ書房
- Kids Matter：WEB動画 Thinking about transition to school
<https://www.youtube.com/watch?v=UcINGuysBE>
(2019 年 4 月 7 日 access)
- 小林由憲 (2018) 「豪保育事情 2018」 京都文教大学ゲストスピーカー資料.
- 見世千賀子 (1993) 「多文化主義政策の確立と多文化教育の展開－オーストラリア連邦政府の選択－」 『筑波大学教育学研究科教育学研究集録』 第 17 集、筑波大学教育学系、pp.55-66.
- 中島智子 (編著) (1998) 「オーストラリアの多文化教育と学校教育」 『多文化教育：多様性のための教育学』 明石書店.
- 日本経済新聞「外国人労働者受け入れ拡大、改正入管法施行 入管庁が発足」 <https://www.nikkei.com/article/DGXMZO43163430R00C19A4EAF000/>
(2019 年 4 月 7 日 access)
- 小野克志 (2011) 『オーストラリア・クイーンズランド州の保育の状況について』 人間文化研究 16 巻 名古屋市立大学大学院人間文化研究科 pp.169-176.
- 佐久間孝正 (2011) 外国人の子どもの教育問題－政府内懇談会における提言、勁草書房.
- 滋賀県商工観光労働部観光交流局 (2015) 滋賀県多文化共生推進プラン (改訂版)
- 殿村琴子 (2008) 『外国人子女の「不就学」問題について』 ライフデザインレポート (第一生命経済研究所ライフデザイン研究本部)、186：35-37.

Abstract

Early Childhood Education and Care in Australia: Supporting Children Who Have Culturally and Linguistically Different Backgrounds

Tomomi HIRANO
Masayoshi KAMEOKA

While in the past statuses of residence were only granted to first and second-generation persons of Japanese descent, the revised Immigration Act which went into effect in 1990 ascertained that third-generation persons of Japanese descent would also be granted the "long term resident" status of residence and, subsequently, the number of immigrants rapidly increased. For this reasons, there are children who have varieties of the backgrounds such as the use of language, cultural background, ethnic roots, the reasons and date of coming to Japan, and they attend each Long Day Care center (LDC center) and preschool. Their early childhood teachers seem to face and feel problems when they care of children and parents every day.

This research aims to present how early childhood education and care(ECEC) in Australia work in terms of The National Quality Frame Work(NQF) and what Transition to school means to children and parents who has culturally and linguistically different backgrounds. This information will also help to understand when ECEC teachers support children who have varieties backgrounds in Japan.

Keywords: early childhood education and care(ECEC), The National Quality Frame Work(NQF), Transition to school

